



世界文学全集 42

ショーロホフ

静かなドン

I

世界文学全集 42 ショーロフ I



© 1963

編集委員

阿部知二 伊藤 整
桑原武夫 手塚富雄
中島健蔵

昭和35年11月25日 初版発行
昭和38年8月15日 6版発行

定価 320円

訳 者 横 田 瑞 穂
発 行 者 河 出 孝 雄
印 刷 者 小 泉 輝 章
装 幀 原 弘

印 刷: 小泉印刷株式会社
製 本: 小泉製本株式会社
本文用紙: 日本紙業株式会社
同 納 入: 東邦紙業株式会社
クロース: 日本クロス工業株式会社
同 納 入: 株式会社小島洋紙店

発 行 所 東京都千代田区 株式 河出書房新社
神田小川町三の八 会社

電話東京(291) 3721~7
振替口座東京10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目 次

静かなドン 1

第一卷

第一編 五

第二編 二八

第三編 二五

第二卷

第四編 四四一

「静かなドン」参考地図.....	三
歴史略年表.....	五三
訳者のことば.....	(横田瑞穂) 五七

静かなドン
I

榮あるわれらの土は 犁ではおこされず……

われらの土は 馬のひずめでおこされた、

榮ある土には コサツクの首が播かれ、

われらの静かなドンは 若い後家衆で飾られ、

われらが父なる静かなドンは 孤児で色どられ、

静かなドンの波は 父の涙、母の涙でみたされた。

おお 父なるわれらが 静かなドンよ！

おまえは なぜに濁って流れる？

ああ どうして わたしが 静かなドンが

濁らずに流れることが できようぞ！

底から わたしを 静かなドンを 冷たい

清水がうちたたこうと

なかでは わたしを 静かなドンを

白い小魚が かき濁す。

主要人物

メレホフ家——典型的なコサック中農。

パンテレイ・プロコーフィエヴィチ その家長。元近衛コサック下士。

イリーニチナ その妻。

ペトロ（ビョートル） その長男。下士から昇進してコサック士官となり、のち白衛軍に投じて戦死する。

ダリーヤ ペトロの妻。

グリゴリー・パンテレヴィチ（グリーシャ） 次男。

この小説の主人公。コサック士官、革命後、最初赤衛軍に投じ、のち白衛軍の有力な指揮官となる。

ドゥニャーシカ 長女。のちミシカ・コシエヴォイの妻となる。

コルシュノフ家——部落の富農。

グリシヤカじいさん 祖父。

ミロン・グリゴリエヴィチ 家長。コサックの富農。

ルキーニチナ その妻。

ミチカ 長男。コサック兵。グリゴリーの友だち。

ナターリヤ（ナターシャ、ナターシカ） 長女。グリゴリー・メレホフの妻となる。

ステパン・アスターホフ メレホフ家の隣人。ペトロと同輩のコサック。その妻をめぐってグリゴリーとの間に争いがおこる。

アクシーニヤ（アクシユートカ、クシユーシャ） その妻。この小説の女主人公。グリゴリーの情婦となる。

エヴゲーニー・リストニーツキー ドン地方有数の地主貴族、退役老將軍の息子。帝政派のコサック士官。

セルゲイ・プラトノヴィチ・モホフ 部落に蒸氣製粉所をもつ富裕な商人。

エリザヴェータ（リーザ） その娘。墮落したブルジョア娘。ミチカ・コルシュノフに犯される。

シユトックマン（オーシブ・ダヴィドヴィチ） 鉄工。

ポリシエヴィク。部落に党の細胞をこしらえる。

シユトックマンの教え子たち

ミシカ・コシエヴォイ 貧農コサック、のちグリゴリーの友だちとなり、ドゥニャーシカの夫となる。

イワン・アレクセーエヴィチ モホフ製粉所の機関士。

ワレート 製粉所の労働者。

フリストーニヤ 貧農コサック。

ブンチューク エヴゲーニー・リストニーツキーの隊の志願兵。ポリシエヴィク。

第一卷

第一編

一

メレホフの屋敷は——部落のいちばんはずれにある。家畜置場の小さな門は、北へ向かつてドン河に道を通じている。淡い緑に苔むした白堊の岩のあいだの、けわしい十六メートルほどの坂をくだると、もうその先は岸辺だ。真珠をばらまいたような貝殻の群、波になめられた玉石地帯の灰色の曲がりくねった河っぶちの先には——風をうけ、どす黒い小波をたててドン河の激流がわきかえっている。東には——打穀場のやなぎの垣根のむこうに——ゲトマンスキー街道が走り、白っぽくなったのがよもぎや、馬のひずめにふみにじられた、褐色の、精のつよいおおばこの草むらがあり、二又路のところにながな礼拝堂がある。そしてその先は——かげろうのゆれたなびいている曠野である。南からは——白堊の岩の山脈がせまり、西には——部落の通りが、広場をつきつて

河べりの開墾地のほうへ走っている。

この前の、もうひとつ前の露土戦役のときのこと、コサックのメレホフ・プロコフイーが部落へ帰還した。そのときかれはトルコの国から妻をつれてきた——肩掛けにくるまった小柄な女であった。かの女はいつも顔をかくしていて、うれわしげな、ひとおじする目をのぞかせることもまれであった。絹の肩掛けは遠い見知らぬ国の香をただよわせ、その虹色の模様は女房たちのそねみを買っていた。捕われてきたこのトルコ女はプロコフイーの家族の者たちにまで顔をあわせるのをいやがるようにしたので、メレホフ老人は、まもなく息子を別居させることにした。かれは女からうけたこの侮辱を忘れかねて、死ぬまで息子の家の敷居をまたがなかった。

プロコフイーは、やがて家をたてた。大工たちが住居のほうをこしらえ、自分は家畜置場の柵を編んだ。そして秋近いころには、せむしの異国生まれのその妻を新しい家へつれ去った。家財道具をつんだ荷車のあとから妻をつれて部落のなかを歩いていった——子供からおとなまでみんな通りへとびだしてきた。男のコサックたちはひげのなかで忍び笑いをし、女房たちはかん高い声でさげび交わした。むさくるしいコサックの子供たちがプロコフイーのあとをおいかけてはやしたてた。けれどまかれは、コサック上着の前をはだけ、耕地の畦でも歩

くように、ゆっくりと足をはこんでいった。まっ黒い掌のなかに女房のきしゃな手首をにぎりしめ、白っちゃけた弁髪（びんぱつ）の頭をおそればなくもたげていた——しかし、さすがにそのほお骨の下（ご）の瘤はびくびくふるえ、いっつもじっとうごかぬ石のような二つの眉（まゆ）のあいだには汗がにじみ出ていた。

そのとき以来、かれのすがたを部落のなかで見かけることはめったになかった。かれは村の集会（あひだい）へも出なかった。村はずれの、ドン（ドン）の岸辺の自分の小舎で、ひとから離れて暮らしていた。部落では、かれについて妙なうわさが伝わった。子牛の放牧の番をしている子供たちの話によると、夕映（ゆうば）の消える夕方ごろになると、いつも、プロコフィーが妻を抱きかかえて、ずっと、タタールの塚へまでつれてゆくのを見かけるといのである。そこへくるとかれは、妻を塚のいただきにおろし、幾百年も風雨にさらされて孔だらけになった墓石に背をむけて腰かけさせ、自分もいっしょにならんですわり、そうしてしばらくのあいだ。曠野のほうをながめている。夕焼けがすっかり消えてしまうころまでながめていて、それからまたプロコフィーは妻を粗らしやの百姓外套（がひち）にくるみ、抱きかかえて家へ帰る、というのである。部落では、そんな奇態なふるまいをどう解釈していいかわからないで途方（とほう）にくれた。女たちは話に夢中になり、なりふ

りかまう暇（ひま）もなかった。プロコフィーの妻のことも、いろんなふうにうわさされた。ある者たちは、かの女はいままでに見たこともないような美人だと断言し、また他の者は——それとは反対な意見をのべた。女房たちのなかでもいちばんあばずれ者の、兵隊後家のマールヴラが、新しい麴（もち）をもらいにゆくようなふりをして、プロコフィーの家へ一走り行（ひとつぱし）ってきってから、この話は万事落着した。プロコフィーが穴倉へ麴をとりに行つたそのひまに、プロコフィーの背負つてきたトルコ女がてんでお話にならないお粗末（そまつ）な女であることをマールヴラは、見とどけてきたのであった……

しばらくすると、顔をまっ赤にしたマールヴラがブラトーク（頭布）を横（よこ）つちよにずらしたまま、小路で、群れ集まつた女房たちにむかつて、しゃべりたてていた。

——なあ、おまえさんたち、あのひとつたら、いったいどこに、あの女のいいところを見つけたんだろうねえ？ せめて一人前の女ならまだしも、あれじゃあ、なにがなんだかえたいがしれなくて……こっちが恥（はにか）ずかしくなるくらいさ。ここいらの娘っ子でも、あの女よりはもっとましだよ。胴体（どうたい）のところ、——黄ばち、みたいにちぎれそうになっていて、目玉ときたら、——まっ黒で、でっかくて、悪魔の目みたいに、ちくちく人を刺（さ）すんだから、やりきれないよ。それに、きつとあれはもうじき子を

むにちがいないよ、ほんとに！

——もうじき生むって？——女房たちはおどろいた。

——きつと女の子じゃあるまい、これでわたしや三人も手がけてきたんだからね。

——ところで顔つきのほうは？

——顔つきかい？ まっ黄いろな顔をしてな。目はぼんやりしてるが——おおかた、知らぬ他国へきたもんだから、おもしろくねえんだろ。それから、おまえさんたち、あの女はな、穿はいてるんだよ、プロコフィーのズボンをさ。

——へえーえ？——女房たちはいっせいにおどろきの声をあげた。

——ちゃんとこの目で見てきただが——たしかにズボンははいていた。ただ側章すけしやうはついていなかったがね、きつと亭主ていしゆの平常へいじやうばきを分捕ぶんとちまったんだよ。長つたらしいシャツをきていたがね、そのシャツの下から、裾すそのほうを靴下くつしたへつっこんだズボンがのぞいていたわ。わたしやそれを見ると、ぞおつとしたよ……

プロコフィーの妻が魔法を使うといううわさが、ひそひそと部落じゅうにつたわっていった。アスターホフ家の嫁は（アスターホフの一家はプロコフィーの家にいちばん近い部落のはずれに住んでいた）、なんでも三位一体祭（復活祭後五十日目の日曜より）（始まる祭日。五旬節とも言う））の二日目の夜明け前、プ

ロコフィーの妻がブラトーク（頭布）もかぶらず、はだしのままで、自分の家の家畜小舎けちやうにきて、牛の乳をしぼっているのをたしかに見たといった。それ以来、牝牛の乳房は子供のこぶしほどにしまびてしまひ、乳がでなくなつて、まもなく死んでしまつた、というのだ。

その年には、これまでになかつたような家畜の疫病えきびやうがはやつた。ドンドンの河岸にある牧舎ぼくしやでは、毎日牝牛や子牛の屍骸しかいが河原にほうりだされた。牛疫は馬へうつつた。村の放牧場に群れあそんでいた馬の群れが消えていった。そこで部落の小路や通りを不吉なうわさが這いまわつた……

コサックたちが、部落の集会しうかいから、プロコフィーのところへおしかけてきた。

主人は、入口の階段へ出てきて、あいさつした。

——なんの用でおいでなすつた、皆の衆？

群衆は階段のそばまでやってきて、嘔せのようにだまりこくつていた。

ついに、一杯ひっかけていたひとりの老人が口を切つてどなつた。

——おまえのこの鬼婆おにばあを、ここへひきずり出せや！裁判にかけてくれるから……

プロコフィーは、さつと家のなかへかけこんだが、玄関まの間のところでみんなに追いつかれた。リユーシニ

ヤ（へちま）というあだ名で通っている大男の砲兵が、プロコーフィーの頭を壁へごつごつぶつつけながら言いかけた。

——さわぐなよ。さわぐなったら、なんでもありやあしねえからな！……おまえをどうしようっていうんじやねえだ。ただおまえの女房を土んなかへ埋けちまおうっていうだけさ。家畜がいなくなつて、部落じゅうが滅びちまうよりは、てめえの女房をくたばらせちまうたほうがまだましというもんだ。だからな、おまえはさわぐでねえ、さわぐと頭を壁へぶつつけてうちくदैてくれるぞ！

——あまっちゃを庭へひきずりだせや！……——表階段のところまでみんながわめきたてた。プロコーフィーと同じ連隊にいた男が、片方の手にトルコ女の髪をまきつけ、もう一方の手で叫びだそうとするかの女の口をおさえつけて、とぶようにして入口の間から外にひっぱりだし、群衆の足もとにほうりだした。絹をさくような女の叫び声が、群衆のどよめきのなかでひときわたかくひびきわたった。プロコーフィーは六人のコサックを投げとばし、居間にかけてこんで、壁から長剣をとりはずした。コサックたちは、おしあいながら、玄関の間から逃げだした。プロコーフィーは、ぎらぎら光り、がちゃがちゃ鳴る長剣を頭上にふりかざして、階段口からかけおりた。

群衆はふるえあがつて庭へ散っていった。

納屋のわきでよたよた走っている砲兵のリューシニヤに追いつき、うしろから一太刀、左肩から袈裟がけに腰のあたりまで斬りおろした。他のコサックたちは、垣根の杭をぶちこわして打穀場をぬけ、ちりぢりに曠野へ逃げのびた。

半時間ほどたつて、元氣をとりもどした群衆はまたこの屋敷へおしよせてきた。ふたりの斥候が、おそるおそる玄関へ足をふみ入れた。台所の敷居のうえに、プロコーフィーの妻が血まみれになつて妙なかつこうに頭をのけぞらせて、よこたわっていた。いたいたしくむきだされた歯のあいだから、ところどころ咬みきられた舌がつきだされていた。プロコーフィーは、頭をふりたて目をすえながら、泣き声をたてる赤いべとべとした小さな塊りを、羊の毛皮の外套にくるんでいた——それは月足らずで生まれた赤子であった。

プロコーフィーの妻はその晩死んだ。月足らずで生まれた赤子はお祖母さん——つまりプロコーフィーの母親が不憫におもつて、ひきとった。

赤子は、蒸した麩でくるみ、馬乳をのませてやった。そうして一月ほどたつて、いよいよこの浅黒い、トルコ人の血のまじつた赤子が育つてゆきそうだという見込み

がついたので、教会へつれていって洗礼をうけさせた。お祖父さんにあやかつて、パンテレイという名をつけた。プロコーフィーは、十二年たつて、徴役からかえつてきた。白髪しろがみのまじつた赭毛あかりのひげを刈りこんで、ロシアの服をきてきたので、かれはまるでコサックとは似ても似つかぬ他国の人間のようにみえた。かれは息子をひきとつて、一軒の世帯を張つた。

パンテレイは成長すると、色の浅黒い、手におえぬ、やんちゃ者になった。顔だちや、すらりとしたからだつきが、母親そっくりであつた。

プロコーフィーはかれに、近所のコサックの娘を嫁にもらつてやつた。

それ以来、トルコ人の血がコサックの血にまじりはじめたのである。そうして、部落には、鉤鼻かぎばなで、奇態な美しさをそなえたメレホフ家のコサックたちがあらわれてきた。部落の者たちは、かれらをあだ名でトルコ人よんだ。

父親が亡くなつてからは、パンテレイは家業に身をいれた。家の屋根を新しくふきかえ、遊ばせてあつた土地を半デシャチナ（一デシャチナは約一町一反）ばかり宅地にくりいれ、そこに新しい納屋やトタン屋根の倉庫をたてた。主人の注文によつて、屋根屋は截ちおとしのブリキ屑くずで二羽ふたはねの雄鶏おんどりをこしらえ、それを倉庫の屋根にとりつけた。この雄

鶏けいどものいかにものんびりしたかつこうが、メレホフの屋敷になごやかな気分をふりまき、またメレホフ一家がなに不足なく、ゆたかにくらしている様子を示していた。

老境にはいると、パンテレイ・プロコーフィエヴィチは、ますます頑健けんけんになった。横ぶとりにふとり、心持ちねこ背ねこせだったが、それでもりっぱな体格の老人であつた。骨張こしらつていて、歩くときびっこをひき（若いころ天覧馬術で跳躍しゅうよくのとき、左足をくじいたのだ）、左の耳には半月形の銀の耳輪みみわをしていた。年をとつても漆黒しつこくのひげと頭髮は色あせず、怒ると前後のみさかいがなくなる。そしてどうやらこの悪癖あくへきのおかげで、かつてはきれいだった自分の女房を、年よりもはやく老けさせてしまったらしい。かの女はいまでは顔いちめんくもの巣をはりめぐらしたようにしわだらけで、でっぷりふとつていた。

長男の、もう妻帯しているペトロは母親似で、小柄で、しい鼻で、小麦色の髪の毛を勢いのいいかずらのようにのばしていて、目はとび色だ。ところが弟のグリゴリーは、父親にそっくりで、六つ年下なのに、ペトロよりも頭半分だけ背がたかく、おやじとおなじように先のたれさがつた鉤鼻かぎばなで、ちよつと目じりのさがつた目には、青みがかった燃えるようなひとみがのぞいており、とがったほお骨は赤みのさした褐色かしよくの皮膚ひふでつつまれていた。グリゴリーも父親とおなじようにねこ背で、笑

うとなにか獸的なものがうかんでくるところまで似かよっていた。

父親のお気に入り入りのドゥニャーシカは、手のながい、目のくりくりした少女だ。それにペトロの妻のダーリヤと小さな赤ん坊——メレホフの家族はこれだけだ。

二

あけがたの灰色の空に、星がまたいたっていた。黒雲のかげから、風がふいてきていた。ドン河のうえでは霧が逆巻きながれ、やがてそれは白堊岩の斜面をのたうち、頭のない灰色のへびのようになって淵のなかへ這いおりていく。左岸の河っぶち一帯、砂州、入江、あしのしげみ、露にぬれた林——それらのものが狂おしい冷たい天映に燃えさかっていた。太陽はまだのぼらないで、地平線のむこうで身もだえしていた。

メレホフの家では、パンテレイ・プロコーフィエヴィチがまずいちばんに目をさました。歩きながら、十字の縫いのルバーシカの襟のボタンをかけ、入口の階段のうへへ出ていった。草の生えしげった中庭には銀いろの露がいちめんにおりていた。家畜を小路に出してやった。ダーリヤが肌着だけで、牛の乳をしぼりにかけだしていた。そのまっ白なはだしのふくらはぎのうえに初乳のような露の玉がはねかかった。家畜置場をつらぬいて一

すじ、草のうえに、ふみつけられた足跡がかすかにおかれた。

パンテレイ・プロコーフィエヴィチは、ダーリヤの足にふみつけられた草が、おきあがってくるさまをじっとながめていたが、やがて居間にはいった。

あけはなした窓敷居のうえに、庭の散った桜の花びらが数片、生気なくばら色を見せていた。グリゴーリーは、うつぶせになって、片手をぐっと投げだして眠っていた。

——グリシカ、釣りにいかねえか？

——なんだって？——グリゴーリーは、ひくい声でできかえし、寝台から足をたらしした。

——行こうや、朝釣りに。

グリゴーリーは軽く鼻息をたてながら、洋服掛けから平常着のズボンをとってはき、その裾を白い毛糸の靴下のなかにおしこみ、それからかかとのところがまくれているのをちゃんと直しながら、ながいことかかって短靴をはいた。

——おっかさんは餌を煮といってくれたかい？——父親のあとについて玄関にでてくると、かれはかすれた声できいた。

——ああ、煮といってくれた。おまえ、舟のところへ行つとれや、おれもすぐいくからな。

老人は蒸された香ばしいライ麦をシャツのなかにうつ

し、落ちたやつは一粒一粒たんに掌のうえにひろいあげた。そして左足へもたれかかるようにびっこをひきひき坂のほうへおりていった。グリゴーリーは淡い顔をして舟にすわっていた。

——どこへ行くだい？

——黒崖へやれや。こないだ釣った、あの木株のしずんでるところで、やってみるか。

舟は地面に船尾の跡をのこして、水にうかび、岸をはなれた。激流は、おりがあつたらひっくりかえしてやろうと、はげしくゆすぶりながら舟をはこんでいった。グリゴーリーは、ただ櫓で舵をとっているだけで、漕がずにいた。

——漕いだらどうだい。

——じゃあ、中流へ出てみるか。

急流をつつ切つて、舟は左岸にむかつてすすんでいった。部落で雄鶏がときをつくるのが、水のうえをわたつて、ふたりの耳にきこえてきた。水面におおいかぶさるようにきりたっている、まっ黒なごつごつした崖に舷をすりつけるようにして、舟は入江のところにつながられた。岸から十メートルばかりはなれた水中に、れの木がしずんでいて、枝をひろげているのが見えた。そのあたりで、うずが褐色のあわのかたまりを追いかけていた。

——釣竿の支度をしろや、おれは餌をまくから。——

父親はグリゴーリーにささやくと、湯気のたっている壺の口に、手をつっこんだ。水面にまかれたライ麦は、しゅつと音をたててしずんでいった。ちょうどだれかが声をひそめて——《シーッ！》といったように。グリゴーリーは、ふくれた麦粒を鉤にさしてほほんだ。

——かかれよ、かかれよ、でっかいやつでも小せえやつでも。

円をえがいて水にとびこんだ釣糸は、ぴーんと張つて、それからゆるんだ。重鉛が、かすかに底へふれた。グリゴーリーは足で竿の根もとをおさえつけ、なるべくからだをうごかさないようにして、たばこ入れをまさぐった。

——おとつあん、今日はだめかもしれねえな……月

が欠けるから。

——マッちもってきたか？

——ああ。

——火をかしてくれや。

老人はたばこに火をつけ、沈んでいる木株の向こうがわあたりで、まだぐずぐずしている太陽をながめやった。——こいつてやつあな、いろいろかかりかたがあるでな。欠け月のときでも、どうかするとつれることがあるだ。

——ちえつ、雑魚めが餌をつつきやがる。——グリゴ

リーは溜息をついた。

舟のわきでびしゃつと音をたて、飛沫をあげて水が散った。すると一・五メートルほどの、まるで赤銅の鋳物のようないが大きな尾を二重に折って、うなりを生じてはねあがった。大粒の飛沫が舟へふりかかった。

——ちよいと待ってろよ！——パンテレイ・プロコー
フィエヴィチは、ぬれたあごひげを袖でふいた。

底にしずんでいるにれの木の、ぐつとつっぱった裸の枝のわきで、いちどきに二ひきのこいがはねあがった。

それからもう一びき、すこし小さいやつが、空中にとびあがろうとして、根気よく幾度も崖のそばで跳ねていた。

グリゴーリーは手製のたばこの、ぬれた端をやけに噛んでいた。鈍い太陽が、かしの木の半ばほどのあたりにあがっていた。パンテレイ・プロコーフィエヴィチは、餌をすっかりつかってしまつて、つまらなそうにくちびるをすぼめて、うごかない竿の先をぼんやりながめていた。

グリゴーリーは吸殻をぺっとはきだした。そしてそれが矢のように流れさつていくのを腹立たしげに見おくっていた。心のうちでかれは父親を恨んでいた——ゆっくり寝させてもくれないで、朝早くから叩きおこしたりしたので。空っ腹にたばこをのんだので、口のなかが、まるで髪の毛を燃やしたような、いやな臭いがした。身をか

がめて、水を一杯すくつてのもうとして身をまげると——そのとたんに、水面から四十センチばかりうえに突きでていた竿の先が、かすかにゆれて、ぐーっとなっていた。

——あげてみる！——老人がほつと息を吐いた。

グリゴーリーは、こおどりして竿をひいた。けれども竿の先が、なおもぐいぐいと水のなかにしずんでゆき、竿が手もとから桶のたがのようにしなった。丈夫なやなぎの竿が、まるで万力にでもかけられたように恐ろしい力で下へ下へひっぱられた。

——いいか、しっかりおさえているんだぞ！——老人は舟を岸へぶつけないように操りながら呻いた。

グリゴーリーは竿をあげようとしてみたが、だめだった。ぶつんと音がして、ふとい釣糸はきれてしまった。

グリゴーリーは平衡を失つて、よろめいた。

——ふん、こん畜生め！——釣に餌をつけようとしてうまくゆかないでいたパンテレイ・プロコーフィエヴィチが、つぶやいた。

興奮したひとり笑いをしながら、グリゴーリーは新しい糸をゆわえて、ほうりこんだ。

錘が底にとどくかとかないうちに——また竿の先がぐつとなつた。

——おっと畜生、きやがつたな！……——グリゴーリー